
恋を傍観する少女

広瀬 ナチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋を傍観する少女

【Nコード】

N14520

【作者名】

広瀬 ナチ

【あらすじ】

公式カップリングを傍観者気取りの女の子が見守る。

だけど、フラグが多すぎて傍観者になれないことが多い。

原作の時間枠がメチャクチャ。
しかも、快斗も新一も知り合いというI F

なかなか、くっつかない二人にモヤモヤな女の子

たまに、自分の恋愛に関与したりしなかったり……？

傍観者気取り

トリップというのは、夢の世界に等しい者で、そのようなことは絶対に起きないと思っていた。

だけど、どうやらそうではなく私は、トリップ……というか転生か微妙な境目にいた。

私は、根っからの傍観気質らしく、公式カップリングを見るのが大好きだ。

でも、中々二人がくっつかずムシャクシャしたりした。
プルルとポケットにある携帯電話が震えた。

「もしもし、あ、巽くん!!」

電話の相手は、私の元の世界でのオタク仲間で恋人。

今の世界では、歌って踊れるアイドル歌手。

今では良いお友達で、彼なりにここの世界を楽しんでいる。

「ちょっと、未央!」

「うひゃっ、て……園子……どーしたの?」

「どーしたの、じゃないわよ! さっきから呼んでるのよ?」

「あ、ごめんね……今、電話してて」

「きゃー! もしかして、あの巽くん!?」

一応、私も巽も帝丹高校に来ていて、しかも、神様は何を考えてるのか、好きな時に体型変えられるように改造されちゃった。

新蘭も好きだけど、コ哀も好きだし……。

ある意味、絶望の淵に立っています。

『で？ 何してんの今』

「あ、これから蘭と園子と一緒に遊びに行くのよ」

「巽くんも来ないー？」

『ごめん、鈴木さん。俺これから仕事だから』

なんだか、泥棒紛いなことや探偵紛いなことをしてるって聞いた
んだけど？

問い質しても無理だって分かってるから聞きはしないけど。

「じゃ、切るから」

ああ、という声がしてすぐに電源ボタンをした。

「ねえ、未央はさ、巽ちゃんと付き合わないの？」

「えゝ、なんで？」

「いや……、嫌そうな顔しないでよ……。まさか、新一くんを好き
なの！？」

「まっさかー！ 工藤くんは人間として好きだけど、恋愛要素は無
いよ。蘭とラブラブなの見たいけどねー」

ほんと、カップリング好きな私としては、早く見たいくらいだ。
でも、両想いで分かってないのもどかしくて良いよなあ。

やっぱ前世の記憶があると精神面がおばさんになるから、おばさ
ん化するわ。

「あー、私も真さんと……」

真園も好きだけど、今遠いところにいるし……。
なんか古風な人で、昔ながらの男性って感じで良いよね。

「未央も恋人作れば良いのに」

恋人作ったら傍観出来ないし……。

私は、恋愛するより初々しい二人を見てるのが好きなんだよねー。

「あ、買い物って工藤くんは来ないの？」

「あの推理オタクが来るわけ無いわよ」

「あ、蘭」

蘭がやつと来て、三人で米花デパートに行く。

また、電話が掛かってきて忙しいなと苦笑いを浮かべる。

「誰から？」

「……えっと」

「巽くん？」

「違う。んーっと、ただの知り合い」

言えない。キッド関連で出会った白馬 探だと、何が何でも言えない。

「はい」

『未央さん？ 今、大丈夫ですか？』

「忙しいです」

「ちょっ、未央！ きっぱり言い過ぎよ」

だって、久しぶりに三人で出掛けてるのに邪魔されるのは癪だし。本当は、蘭と園子の友情を遠くから見ていたかった……。何でか分からないけど、フラグが立ちすぎて、傍観気取りがメイに接触するとは思わなかったけど…。

『すみません』

「用件だけ言って？」

『キッドが予告状出したようで、僕は今、行けないんですよ』

「へー、じゃあね」

『……………未央さん？』

ふとトーンが恐ろしいほどに下がり、ゾクツと寒気がした。怒らしちゃいけない。

「残念だけど、今日は予定が詰まって……………」

『いえ、東の高校生探偵が向かうみたいなんですよ』

あの時計台の話か？

青子が寂しそうにしてたし……。

はぁ、予定は引き延ばしにするかな。

「分かった。行けば良いんですよ」

結局、私は、うまく操られたわけだ。

蘭たちと一緒に、デパートで遊んでも、キッドの予告ばかりが頭から離れなかった。

ブラック・スター

「月が満ちる土曜の夜、零時の鐘と共に貴方の懐より天高き時計より頂きに参上する……………怪盗キッド……………か」

新聞紙に載った白黒の予告状の写真。

予告状自体を見たのは初めてだった。

いつも携帯電話に送られてくる文字だけだったから、変に新鮮な気持ちだった。

「つてかさー、白馬くん…………キッドをどうにかしろって、どうやって会えて言うのよ…………。いや、工藤くんに会った方が良いか」

あー、訳が分からない!!

頭をボリボリと掻いてると、一機だけ止まっているヘリコプターがあった。

「ははは、まさかね」

とは言ったものの、近付いてみると誰も乗ってはいなかった。

たしか予告までは時間があるから？

いやいや、いくら何でも工藤くんといたら↓ヘリコプターに乗る↓高いところに行く↓工藤くんが無理をする↓私の寿命が縮む…………。

「最悪だ…………」

「何がだよ？」

「工藤くんは死神だって……………え？」

「誰が死神だ、バーロ」

何だかキレてるように見えるのは気のせいではない。
下手したら死神よりも怖いような気がする。

「目暮警部、未央が高いところ好きらしく、乗ってみたいらしいですよ」

「んなっ!？」

鬼だ。こいつは完璧に鬼だ。

別に高所恐怖症ってわけじゃないけど、やっぱり命が関わってると傍観するのは嫌になる。

「さあ、時間がない!」

「…………まじ?」

「マジだ」

何だか工藤くんは機嫌が宜しくないようで私の背中を押してヘリコプターの中へと入れられた。

「巽くん、私は、今、あの世へダイブするようです」

「縁起でもねーこと言うな。で、警部、どこを経由するんですか?」

「あ、ああ。少し工藤くんに手伝ってほしいことがあってだね」

「今時、予告状を送ってくるレアな怪盗紳士のことだね」

「未央は知ってたのか?」

「…………まあね」

中身の人とも知り合いな訳だしね。
流石に話したいって何かは無いし……。

「工藤くん」

「なんだ？」

「蘭と、最近デートしてないの？」

「なっ、何言ってるんだよ！！ そんなことねーから」
「……ふーん」

見るからに互いに想ってるようにしか……。でも、宮野志保も好きだし……。

「そろそろだよ」

窓から見れば、確かに大きな時計台があった。
ロンドンにあるビッグベンを思い出した。

「その人のすごいところは、誰にでも変装できることなの」

「……それは声とかも容姿を完全にか？」

「そう。子供にはなれないけどね」

「なるほど……、なら……」

ヘルメットに付いてるマイクで何かを話し始めていた。

たしか、快斗はIQ400だと白馬くんが言ってた訳だし……。
って、青子に会うの忘れてた……。
帰りに青子ん家に行かなきゃ、叫ばれそうだ。

頭が良いキッドのことだから、余計なことが頭に入ってるだろう。

工藤くんが言ってた免許証番号を刑事さんに言えば、シルクハットを見つけたという刑事さんが、名前と年と誕生日の後にそれを聞くと、覚えていたせいで疑われた。

普通、そんなこと覚えてる人はいないしね。

その後、工藤くんは時計台の出入口を封鎖しろと言った。

「こちらの指示があるまで絶対に開けないように……。これで彼は穴の中で両手をもがれたモグラ同然だ」

「袋の中のネズミじゃないのかな」

だけど、工藤くんは無視をして、パソコンを操作していた。

トイレの方面でキッドを見失ったらしい。

工藤くんはトイレの奥に設置されてる通風口のネジが外れてないか聞くと、外れてるようで、その先にキッドを見つけたらしい。

快斗、焦ってるだろうな……。

キッドの好敵手が隣にいるんだもの。

でも、快斗も工藤くんも会い方を変えれば良い友達になれただろう。

工藤優作さんと黒羽盗一さんのように……。

「彼は今、犯行前に正体を暴かれ動揺を来し……彼の計画の歯車は狂い始めている。確保するには絶好のチャンス！」

『だ、誰だ！？ 何なんだお前は！？』

「工藤新一……探偵ですよ」

コナンの時もいつも探偵と名乗るよな。名前と共に……。

『こちら中村！ 目標、通風口からでようとしている模様！ ど、どうしますか？』

「焦らないで：もはや獲物はあなたのツメにかかったも同然！ あなたの現在位置を教えてください！」

中森警部、相変わらず元気だな。叫んでばかりだ。血圧上がっちゃうんじゃない？

『こ、こちら中村！』

通風口出口で目標を見失いました！』

中森警部が場所を聞くと、四階の東側の廊下と言った。しかも、警官の変装を解いたという。

「おかしい」

「え？」

「ああ、妙だな。警官が密集するあの空間で警官の変装を解くのはヤドカリが殻を捨てて海中を彷徨いているようなもの……僕には理解できない」

時計の針が予告時間をさして、リンゴーンと鐘が鳴る。工事中の足場から煙が湧き出るように出た。そして、時計の針が消えてしまった。

「……………！」

「……………あ、揺れてる」

「ん？ ヘリコプターか？」

「いえ……。すみません、ヘリをもう少し時計台に近付けて…」

ヘリが近付くと、文字盤が波打つように揺れていた。
だんだんと嫌な予感がしてきて、端っこによった。

工藤くんが言うには、煙幕と共に文字盤を照らすライトを切り、前もって仕掛けていた巨大スクリーンで文字盤を覆い、そこに時計の針が消える映像を工事中の足場に取り付けておいた映写機から投影してたと言う。

今、彼はスクリーンの裏で短針についてる宝石を取ってるみたいだ。

工藤くんは目暮警部から拳銃を取り、スクリーンに備え付けてる棒に付いてる紐を撃ち棒を落とした。

キッド、焦ってるだろうな……。どう解決するかな？
って、巽くんからメール来てるし……。

『今、どの辺？ 仕事もうすぐ終わるから』

いや、用件や主語が無いよ。

はあ、巽くんって変に天然だから相手するの大変だわ……。

「お、おい工藤くん!？」

「大丈夫! 人には絶対当てませんから…」

「いや、そーいう問題じゃなくて…」

「警官から銃を奪い取る行為も、無断で撃つことも法に触れるってこと分かってる? って聞いてねーし……」

座長の顔を見るにしても、私の方からは見えないけど、前にめり込んで見てみると、工藤くんが銃を撃つのと同時に、トランプ銃で上に止められていた縄を撃ち落とし下に落ちていった。

「な、なんて奴だ。スクリーンと共に人込みの中に落ちるとは……」

中森警部から話を聞くと、暗号があるらしく、目暮警部はメモ帳に何かを書いていた。

円の中に、コナケノネナハワテサニオと書いていた。

重要証拠物件として予定されていたその時計台の移築は中止するみたいだ。

「まあ、良かったじゃないか、時計台は無事で彼の犯行は失敗に終わったんだから……」

ヘリコプターは時計台から離れていった。

「おまえ、これからどうすんだ？」

「うん、友達の家に行くんだ」

「そうか。じゃあな」

「ちゃんと、蘭と話してあげてよ？」

だって、いつコナンになって会えなくなるか分からないから。だから、今のうちたくさん会ってあげて……。

それが逆に苦しめる結果になるとしても……やっぱり、一緒の時間があったほしい。

「……分かった。じゃあな」
「うん、じゃあね」

工藤くんと別れ、青子の家に向かうとした。
快斗がいるわけだし、励ましはいらないけど、久しぶりに会うわけだし……。

「……………ん？ 巽くん……………どうしたの？」

『いや、終わったから。未央ん家にいる』

「えっ、うそ！？ もう、青子ん家に行こうとしてたのよ？ もう
ー」

『悪いって……………。な、俺、内容忘れたんだけどさ……………時計台、何が
書いてた？』

「明日の新聞に載るから……………まあ、ヒントは与えても良いかな……………
？」

——カタカナをローマ字に直して、母音を一文字ずつ時計回りに
ずらして読むと……………。

K O N A K E N O N E N A H A W A T E S A
N I O

K O N O K A N E N O N E H A W A T A S E
N A I

【コノカネノネハワタセナイ】

ちよっかい(前書き)

巽くんとの話

ちょっかい

「あんまり二人をくっ付けさせようとすんなよ？」

「え……、なんでさ……巽くん」

「あいつらには、あいつらの時間があるわけだし……俺らが干渉して良い時間ではない」

「……………だけど、私は……………」

「未央」

「……………」

久々に巽くと喫茶店で会っている。

巽くんは変装してるけど、眼鏡だけだった。

「ただでさえ、俺が工藤新一との縁が強い」

「……………まさか、親戚になると思わなかったからね」

巽くんは、工藤新一と親戚になってたと、小学校で再会し気付いた。

私は気付かなかったのに、巽くんは私のことに気付いていた。変わっていたのに……………。

「愛の力だね」

「そうだな」

「……………冗談だったのに」

本気で言われちゃ、私もお仕舞いだな。

照れるって行為が無かった私も恋愛能力が低いと見える。

「で、用ってのは？」

「あ、無駄話してたね。あのさ、巽くん、まだ聞いてないと思うけど、工藤くん……」

「コナンになったか？」

「……うん。やっぱ、直感すごいね」

私の言葉の淀みに、巽くんはすぐに気付いた。

巽くんは、出会った時は社会人だったから、名探偵コナンを見てる暇は無かった。

だけど、原作を持ってるらしくだいたいの内容は分かってるけど、でも、それもだいぶ前だから分かってない。

「んーっと、話ってのはそれだけ……」

「もしかして、行くのか？ 小学校に……」

「うん。転入する……」

「なんで……」

「せっかく貰った力を使わないなんて、勿体無いでしょ？」

「……ふっ。ただ、行きたいだけだろ？」

さすが分かってるらっしゃる。

何年一緒にいるんだろうな……。

「……まだ、話があってさ」

「さっき、もう終わりだって……」

「……園子に、恋人作らないの？ って聞かれてさ」

「……ふーん」

ただの雑談だったけど、話してるうちに恥ずかしくなってくる。

「……これ、見て」

「……………ラブレター？」

「うん……。イタズラ、かなあーって」

「いや？ 本気だろ。ほら、何度も書き直しているからな」

今時、シャーペンだかで書いては消しての繰り返し。

純情だと思われるそれに、顔がにやけそうになる。

「広末 和樹……か」

「知ってるの？」

「ああ、野球部で次期部長って言われて生徒副会長らしいな……頭も良いらしい。まあ、俺らには敵わないけど」

そりゃあ……。ダブル工藤くんが敵う奴がいるなら見てみたいよ。でも、ヒロスエ カズキかあ……。

やっぱり、イレギュラーがいるから、イレギュラーが存在する、か……。

「広末くん、か」

「まあ、顔も良いみたいだし付き合ってみたら？ 思春期だし、もう人生という道は無いのかも知れないのだから」

「……………」

そうだ。私たちは一度死んだ。

巽くんと一緒に、旅行に行っていた時に……？

「でも、過去の記憶が曖昧だね」

「ああ、旅行に行っていた時の楽しい記憶しかない。その後、どうなったのかも分からない」

巽くんの言う通りだ。

何が起こって何があったのか思い出せない。

気付いた時には、この世界で幼稚園に通っていた。

「……じゃあ、巽くんも……恋をするの？」

「そりゃあな。好きな人もできるし……」

「芸能界、可愛い子いっぱいもんね」

言ってて虚しくなったりする。

まだ、愛し合っていた時に生き別れ。

まだ、巽くんに好意を持ってるのは確かで、心の中のモヤモヤが晴れない私もいるわけで……。

「……そうでもねえよ」

「え？」

小さく、聞こえるか聞こえないかの曖昧な声量が響いた。

「ま、とにかく。あんま、ちょっかい出すなよ？」

巽くんが片手をテーブルに着き立ち上がった。

もう話が終わりなんだと思うと、心が痛みを訴えてきた。

「帰るの？」

「ああ、今まで残した宿題を片付けないとな」

「……そっか」

伝票を持ち、手を振り立ち去っていった。

小さな蟠りがだんだんと大きくなり、胸を押し潰そうとしていた。

「……はぁ」

パンパンと頬を叩き、意識を別に戻した。

「私が、今、出来ることはなんだろう？ 私が迷って良いものじゃないし、私がすべきことも分からないし」

私は、決めていたんだ。

傍観者になると…、見守ると、そう決めたんだ。

傍らで静かに見守ろう。

死亡フラグ

今日は、雲一つない快晴で、久しぶりに散歩しようかと思いい散歩に出ていた。

「あー、未羽ちゃんだー！！！」

「本当ですね！！！」

振り返ると、少年探偵団たちがいた。

でも江戸川くんは来ていないみたいだ。

ちなみに、未羽^{みづ}は偽名だ。

運が良いのか観察力が足りないのか、気付いてないふりなのか、

江戸川くんは気にしてない。

「えっと、誰だっけ？」

「ひどいよー！！！」

「ごめんね、来たばかりだから名前分からなくて……」

「仕方ないですよ！ 来たばかりですからね。僕は、円谷光彦です」

「歩美は、吉田 歩美だよ」

「オレは小嶋 元太だ」

名乗られても、私は名字でしか呼べないんだけど……。

「えっと、円谷くん、吉田さん、小嶋くん？」

「えー！ なんで名字なの！？」

やっぱり聞かれた。

蘭たちと話をした時も同じことを言われた。

私の心の杭が止めるように言ってるような気がしてるんだ。

「ごめん。名前は、無理」

「……………」

そ、そんな悲しい顔しないで……。

私の弱点をグイグイ食い込まれるようだ。

「じゃっ、じゃあ、いつか名前と呼んでね！ 未羽ちゃん」

「う、うん。努力するよ……」

ああ、この調子じゃ、絶対に名前と呼ぶ日が来るわ……。

自分からフラグに会いに行ってることに、今頃気付くなんて、私
ってバカだ。

「……で、私に何の用かな？」

「特にはねーよな」

「偶然会いましたからね」

「そうだ！ 今から博士ん家に行くんだよな」

「一緒に行こうよ！」

「……………博士？」

「ああ！ 阿笠博士！！ くっだらねーゲームばっか作ってんだよ
な！」

小嶋くんがへへッと笑いながら言うけど、阿笠博士ちよつと可哀
想だ。

「へえ……」

一度、工藤くんの家に行ったことはあるけど、阿笠博士と会ったかな？

「未羽ちゃん？」

「何でもないよ。阿笠博士、か」

「ダメなら良いんだけど……」

灰原さんはまだいないんだよね……。

学校で見かけなかったし……、漫画の記憶が無くなってきたし……。

どうしよう……。断ったら断ったで、この子たちの悲しい顔は見たくないし、行ったら行ったで江戸川くんに会うだろうし……。まあ、可能性のうち、だけどね。

「……………分かった。行ってみようかな？」

小学生のうちは、問題無いとしても、いつかは都合が悪くなるといっただけで仲間外れになったりする日もくる。

この子たちは大丈夫だと信じたいけど、ちょっと怖いね。

久しぶりにこの大きな建物を見た。

いつも思っていたどうやって、こんなデカイ建物が出来るのだろう？

博士って、意外と稼ぎが良いのかな？

あ、でも工藤くんとも良いよね。

さすがは女優と推理小説家なだけある。

私んところは中流だったから、普通に過ごせたけど…。
母さんもヘソクリ使って旅行に行っちゃってるみたいだし？
父さんは父さんで、出張だったし。

「未羽ちゃんー！ こっちだよ！！」

「あ、うん」

中に入ると、綺麗にしてあって広々としていた。

「？ その子は？」

「未羽ちゃんだよ！ 新しく転校してきたの」

「……そうか。未央くんに似てるのう。眼鏡掛けてるが……」

確かに私は今、眼鏡を着用している。

子供の姿だから、化粧しなくて良いが、しなきゃしないで巽くん
に怒られる。

「未羽はゲームできるか？」

「え、うん。できるよ。得意まではいかないけど…」

視線をソファーに移すと、誰かが寝ていた。

青い服、七五三とかで着そうな服が見えた。

どう考えても彼しか思い出せない。

「あー、コナンくんがいる！！」

グッスリと眠ってる江戸川くん。

眼鏡外してない所を見ると、けっこう神経は使ってるみたいだな。
蘭と一つ屋根の下、気になる異性と寝るってのは並大抵なものじ

ゃない。

精神をかなり使うからな。

「……ま、どれも私には分からないケド」

「未羽ちゃん、何か言った？」

「ふふ。何にも？」

小さく話したのに、近くにいた吉田さんには聞こえちゃったみたい。

「未羽ちゃん？」

「何でもないよ。彼は？」

「江戸川コナンくん」

「オレたち少年探偵団のメンバーだ」

「……少年……探偵団……って、なに？」

いや、知ってるけど、小学生の私が知ってたらおかしいから聞いてみるしかない。

そうしたら、小嶋くんが説明してくれた。

由来は、シャーロック・ホームズが組織した少年探偵団と、江戸川乱歩『少年探偵団シリーズ』だと携帯辞典で見たが、似たような内容だった。

「未羽ちゃんも入る？」

「えっ」

「なんで嫌そうな顔をしてるの？」

なんだか癖みたいだな。

顔に出やすいのは何とかしないと……。

ポーカーフェイス、ポーカーフェイスか……。

「私、推理苦手だから……」

死亡フラグ掲げて笑う人なんていないでしょ……。
それに、直感力も無いし判断力も無い。

「……」

「嫌がる奴を無理して誘うことねーよ」

「！」

「コナンくん……！」

「ふぁ……。うるせーから目覚めちまった」

や、やばい。関わらずにしようと思ってたのに……！！
なんで、こんなことになっちゃうの？

「……別に、嫌ってわけじゃなくて」

江戸川くんは頭をボリボリと掻きながら起き上がる。

じゃあ何でだ、と言いたそうな顔をする。

さっきから小学生っぽくない。怪しまれる。

「えっと、推理小説。日本のしか読んだことなくて、けっこう古いのばっかで……その……とある作家さんのとか。推理小説だと、ほら危険な目に遭うじゃない？」

だから、怖いんだと言えば江戸川くんは迷ったような顔をして
いた。

誰だって、巻き込むのは上策じゃないと考えるだろうし、その、
江戸川くんだって、よく分かってるはず。

「だからね、みんなも……危ないんだって理解してほしいな。みん
ながしてるのはゴツコじゃない。命がけなんだよ？」

「……………」

「別にやってることが間違いつかじやない。でも、間違えれば怖い
んだよ。だから、無理しないで……」

「……………未羽ちゃん。未羽ちゃん優しいね!!」

「え…………？」

「だって、歩美たちの心配してくれてるんでしょ！　だから、大丈
夫！　危ないことはしないから。約束するから……………泣かないで
？」

「……………え」

吉田さんの言葉に私は頬を触った。

涙で濡れていたことに気付いた。

涙を流すなんて、ここ何年も無かったのに……。

「約束するよ!」

「僕も約束します!」

「お、オレも!!」

「……………」

なんて良い子たちなんだろう……。

今のは私のお節介なのに、気にもせず真っ直ぐに受け止めた。

これは成長途中の彼らの優しさなのかもしれない。

これはこれで、この体になって正解だなんて思えた。

「ま、俺がいるわけだし、こいつらを危険な目には遇わせねえよ」
「……………江戸川くん」

そっか。そうだね。彼らのストッパーがいれば問題無いのかも
しない。

「……………そっか！ 私の気のせいなんだ」
「気のせい？」

「えへっ、だって恐い想いをするの嫌じゃない？」

あー、疲れる。子供のふりってキツイわ。

灰原さん、良くやるなー。

江戸川くんもだけど…………。

「……………ふーん」

「まあまあ、ジュースでもどうじゃ」

阿笠博士がお盆にオレンジジュースを乗せて持ってきた。
会話が途切れたお陰で私はホッとした。

「未羽ちゃん一緒に座ろう？」
「え、うん！！」

吉田さんの隣に座ると、ジュースが手に渡る。
オレンジジュース……………かぁ。あんま飲めないんだよね…………。
甘いのが苦手だし、味覚が落ちてるから美味しいか美味しくないか
も分からないし…………。

「未羽ちゃん？」

「な、何でもないよー!!」

飲んだふりはダメだとしても、口にしないと怪しまれるし……。どうしたら良いんだろ……。

「おめー、もしかしてオレンジジュース飲めねーんしゃねえ？」

「……………」

なんで分かったのだろう？

顔には出していないつもりなのに……。

「他の奴らが口にしてんのに、おまえだけは……コップを見るだけで近付けようとすらししない」

「……………」

「ジュースに何か入ってる——」

「え!？」

みんながジュースを持ちながら驚いていた。

顔を真っ青にしたりした。

阿笠博士は首を傾げていた。なるほど……。

「いくらなんでも小学一年生がそんなこと考えないよな」

「…………ふふ。そうだよ。私、甘いのがダメで飲めないんです。ごめんなさい、えっと、阿笠さん」

「博士で構わんよ。すまんの、すぐに別の飲み物を用意しよう」

阿笠博士はキッチンに行った。

私は、見抜かれたことに内心ドギマギしていた。

「でも甘いのだメだなんて勿体ないよな」

「ですよ！ 美味しいものも美味しく感じれないなんて……」

「……なんか、可哀想」

「……悲しくないよ！ 美味しいものは世の中にたくさんあるからね」

「鰻重うめーぞ！」

「ふふふ！」

味覚に楽しみがなくても、感覚、感触が分かるのだから。

初めて、この世界に来て良かったって思えた。

この世界が私の全てなんだと思えた。

死亡フラグ（後書き）

神様らしき良い人？ から貰った力は年齢を誤魔化せるだけ

やっぱり戸籍は存在しない

巻き込まれ（前書き）

オリジナルでコナン影薄め……

巻き込まれ

何がどうしてこうなったのか、誰か教えてください。

ことの真相は、私が、いや、子供の姿のままの未羽の姿でサークルの集まりでとあるロッジに来ていた。

それは、オンラインゲームでクエストをクリアするための国があるって、探偵の国というグループの王様が私で、今日はその国に所属してるメンバーが集まる。

そして、それが始まる二時間前。

「まさか、王様がこんな可愛い女の子とはね」

「アリアさんが、こんなにもイケメンさんだとは思わなかったよ！」

彼は大臣のアリアこと有馬ありま飛鳥あすか。

見た目は芸能界にいそうな爽やかお兄さん。

「ハローです！ 王様ー！ ウチ、武者です！」

「あ、こんにちわ！」

武者こと、坂下 ミクリ。

ゴスロリの格好をしてて、顔立ちが外国人形みたい。

「えっと…」

「ウチ、ハーフなんだよー。イギリスとのね？」

「そうなんだ！ あれ？ アズマさんとムーガさんは？」

「二人とも仲が悪いから、途中で会っちゃってんじゃない？」

「……そっか。んー、じゃあ、有馬ちゃんとミクリちゃんはシーツを取り替えて？ 纏まったの廊下のキャスターに乗ってるから取って

って？」

「はい」

「分かったぜ」

二人は爽やかな返事を残して二階に行った。

このロッジの持ち主は、私じゃなく、東^{あずま}准^{じゆん}くんといってこの離島を全て買収するほどの財閥の息子だという話だ。

もう一人のムーガさんは齊藤^{さいとう} 京平^{きやうへい}さんは最高年齢で見た目は恐いおじさん。

「……なんかリーダーになっちゃったみたいだけど、大丈夫かな」

リーダーなんて対応しにくいのに、こんな重荷……。

私は携帯電話を片手に迷いを浮かべていた。

「おっと、電話って………えー、出たくない」

だって、この人から電話だなんて絶対に有り得ないって思ったんだもの。

江戸川くんからのまさかの電話に、私は、身動きが出来ない。だけど、震えていて出てしまった。

『……未羽』

「な、なに？」

『おめー何してんだよ？ 学校にも来ねえで』

「……うん、蘭お姉ちゃんなら分かってる。だから聞いてみて？」

あ、あと………あれ……？」

『……………未羽?』

「……………っ……………はぁ……………眠っ……………なに……………これ……………助け……………」
江戸川……………く……………」

『おい! 未羽!! 何があった!?!』

頭の中がモヤモヤとして眠りが深くなってきた。
なんで、こんなことになったのだろう……………?

「……………」

『おい! 未羽!! どうした!! くそっ……………何が……………起きて……………』

声がだんだんと遠ざかっていく。
ツーと耳鳴りがするように痛みを覚えていく。

どのくらい寝ていたのか分からない。

ただ、頭の痛みが酷く鈍い痛みが続いていた。
コメカミを押さえながら体を起こすと、手元に何かが当たった。
視線を辿り移すと、見えてはいけない物が手に触れた。

「……………なんで……………いやあああああああああああああああ
……………」

手に触れたのは、真っ赤な血が付いた包丁だった。
その先には京平さんが倒れていた。

「ど、どうしたら……………く、工藤くんなら……………えっと、生きてるか確

認……でも……ああ……無理、恐い……」

生で見るなんて思わなかった。

私の目の前でそれを見るなんて思わなかった。

『未羽!!』

「……え、江戸川く……ん」

『どうした!!』

携帯電話はずっと切れてなかった。

江戸川くんは私の電話を切らず、ずっと私の心配してくれていたんだ……。

「助けて……江戸川くん……目の前に……遺体があるの……包丁で刺されてて……」

ボロボロと子供みたいに涙を流していた。

助けて、助けてと何度も何度も紡いで……。

「しかも……密室……っばいの。カギも掛かって……窓も鍵が……はあはあ……」

『落ち着け! 大丈夫だ。大丈夫だから』

「……っ、く……怖いよ……助けて、巽くん……巽くん……巽くん!!」

『!! 巽……?』

「どうしたら、良いのよ……どうしたら……」

何がどうなってんの? こんなフラグはいらないよ……。

『その人、息はある?』

「……………ない、みたい。脈も……………分からない」

『……………とにかく、現場は荒らさないように、誰かが来てもそこには入れるな!』

「……………分かった。でも、カギは?」

『……………外カギはあるのか?』

「うん、スペアは無くても私だけ持ってる」

『……………外出てカギをかけろ。誰も中にいれるな。そして、外界に出すな』

混乱してクラクラする中、江戸川くんの言葉だけが頼りで言う通りに動いた。

そして一旦、電話を切った。

その数十分後、巽くんからも電話が来た。

『未央、大丈夫か?』

「巽くん」

『仕事休んできた。新一と一緒にそっちに行くから、身を守ってろ』

「……………うん」

「未羽ちゃんー、大変だよー」

「きゃっ!?! ミクリちゃん」

どうしたか聞いてみると、電話線が切れてて携帯電話しか通じないらしい。

「他に、誰かいる?」

「ウチと飛鳥くんと東くん」

「東くん、来たの?」

「うん、さっきね」

私が眠っている時だろうか?

でも、分からない。京平さんも来るのが遅かったわけだし……。

「とにかく、居間にみんな揃ってください」

「んー、分かった」

『無理すんなよ？ 殺人をしたやつは何をしでかすか分からないんだから……誰を信じ疑うかも厳しいところだから』

「うん」

私は、電話を切るとミクリちゃんと一緒に居間に向かった。

「……」

沈黙が痛く続いていた。

この三人の中に、犯人がいるかもしれない。

——ま、まさか本当に私が犯人！？

んなバカな……。

「なに百面相してるの？ 王様」

「……いや、なんでも……ない」

声震えてないだろうか？

心が異常に揺れ動いてるのかもしれない。

「！」

充電があまりない。

もう、電話はできない。

私は、そっと電源を消した。

——早く来て、巽くん……。

「……………」?

ミクリちゃんの裾が上がってる？

来たときは普通だったのに、なんで？

東くんも腕に怪我を負ってるし、飛鳥くんも指先を怪我をしていた。

ダメだ。誰も彼も怪しく思えてくる。

「……」

怪しくて疑いがあって、巡り狂って人間不信になりそうだ。

「そろそろ、お昼だね」

「あー、お腹が空きましたー」

「俺、料理作ったんだけど食うか？」

「飛鳥ツチン、作れんのー？」

なんだ？ アスカツチンって……。

と言うか、飛鳥くん料理作れるの？

「あー、簡単なものならなあ」

「……じゃあ食べたいな！ 私もお腹が空いちゃった！！」

暗い雰囲気を出しちゃダメだ。
子供らしく振る舞わないと!!

「じゃあ準備をするから」

正直、食欲なんてない。

あんなものを見た後で食欲がある人なんていないだろう。

「……………あ、飛鳥くん」

「ん？」

「私、甘いのがダメで…………その…………」

「そうなのか？ んー、大丈夫だと思うけど…………。甘い味付けなの無いから。強いて言えば人参かな」

「？ 何の料理？」

キッチンに向かうと、五人分のステーキがあった。
一人分余ったステーキが妙に寂しく思えた。

「あれ？ 斉藤さんは？」

「そうだ、どこ？」

「……………」

「うー、お腹が鳴るよー」

「…………じゃあ、先にご飯にしようか。後で迎えに行けば良いし」

ステーキを持つとリビングに向かい椅子に座った。
私の隣にミクリちゃん、私の前に飛鳥くんとその隣に東くん。

「わあー！ 美味しい!!」

「ほんとだね!!」

やっぱり、分からない。

感触は何となく分かるんだけど……。ちょっと残念かな？

「飛鳥くんって、料理人!？」

「いやいや、素人だよ。一人暮らしだからちよつとやるくらいで…
…ね」

だから指を怪我をしていたわけか……。

「? 今、なにか音がしなかった？」

「いや？」

「……」

本当にそうなのかな？

本当に気のせいなのだろうか？

このモヤモヤは何だろう。

前にも同じことがあったような……そんな予感が……。

思い出せ! 思い出せ!!

「……………あ」

「未羽ちゃん？」

「……………巽くん!!」

私は、急いで玄関に出た。

夕闇に染まる崖から遠くを見る。

何もない……。やっぱり気のせい……？

「……………巽くん」

お願い……。

あの時みたいに、私の名前を呼んで……。

「……巽くん」

「……………」

「え？」

ゴォオと音に紛れて何かの聲がした。

小さい音で本物かどうか分からなかった。

でも、トクントクンと懐かしいような心地よいリズムが鳴る。

「……………たつみ……くん」

「……………未央!!!!!!」

「!!」

巽くんの大きな声が聞こえた。

いつもの冷静な声色じゃなく、必死で焦ってる声が暗闇から聞こえた。

暗闇の中に小さな光が見えた……。

巽くんが約束通りに来てくれた……。

リビングに巽くんと何故か江戸川くんもいた。　どうやら江戸川くんが港にあったボートを勝手に借りてここまで来たらしい。

「未羽、案内してくれるか？」

「あ、うん。巽……お兄ちゃん」

三人をリビングに残して二階の部屋に向かった。

部屋のカギを開けて中に入ると、さっきまで見ていた光景と何ら変わりはなかった。

「……うつ」

「未央はここにいろ」

巽くんが小さく私に話してくれて、廊下の壁に寄りかかるように座ると、江戸川くんと巽くん中で中に入っていった。話し声だけが聞こえてくる。

「本当に密室だな」

「ああ、未羽がいたのはこちら辺だろうな。凶器もそのままだし」

「だが、犯人はどうやって出たんだ？」

「未羽が入ってきた時はカギは？」

「聞いてみるか」

床の軋む音がして顔を上げると巽くんがいた。何だか、私が部屋に戻った時にカギはどうしてたかと聞きたいらしい。

頭がモヤモヤしてて思い出せないんだよね……。

「……部屋」

部屋。

入って、バルコニーに行って外見てた……。

「あ、ううん。カギはしてなかった」

「そこで意識を失った」

「催涙ガスってどこか？」

「催眠ガスな？ 巽」

「あ」

こんな時まで惚けないで欲しかった。
だけど、巽くんの言葉に私はホッとした。

「催眠ガスで眠ってるうちに、犯人が来た。血痕が思ってるより少ないしな。犯人は別んとこで殺害し、ここに運んだ」

「現場は違うとこだな。犯人は被害者を包丁で刺したあと、ここに運んだ。でも、どうやって犯人は出たんだ？ だって、スペアキーは無いらしいし。なあ、未羽」

「う、うん」

「でも、ここを保持してんのは……東って奴なんだろう？」

「……じゃあ、東くんが犯人!？」

「いや、まだ決めるには早い」

江戸川くんは中に入っていく、壁を叩くような音がした。

「なあ、新一。ここ見てみろ」

「あ？ 木の切れ端か？」

「……………未羽!!」

「きゃっ、な、なに？」

巽くんは私の手を掴むと指を見てきた。

何があだか分からず首を傾げると、ベッドの木造が少し剥がれてそこに血が付いていたらしい。

「ベッド……？」

「ベッドの真横に遺体があっただろ？　だから、被害者が犯人しか血は付かない」

「……………あ」

「どうした？」

「いや、指と手を怪我をしたの二人いるよ」

「……………」

巽くんはどうやら犯人を断定してるつもりは無いみたい。
余計な感情で正しい推理が入らなくなるから、らしい。

「…………未央、何か見てないか？」

「ううん……………」

「…………ん？　なるほど、未央、カギはどこにあった？」

「えっと、私の近くに…………って、そういえば、なんでバルコニーの扉閉まってたんだろ？」

「犯人が密室に思わせるため閉めたんだ。その方が、捜査を攪乱させるからな」

巽くんの言ってること難しくて分からない。

どうやら、バルコニーに出ると犯人は思わなかったみたいだ。

というか、どれだけ強い催眠ガスだったんだろ？　バルコニー開いてたのに…………。

「あいつの部屋を見てきた。ゴミ箱にあったぜ」

「やっぱり、な」

何の話をしてるんだろう？

ていうか、二人だけで解決しないでほしい。

犯人、本当に分かったのかな？

リビングに集まると、みんなが暗い表情をしていた。
確かに、不安でいっぱいだろう。

「犯人が分かりました」

「あなたは、有名人の工藤巽くんでしょう！？　なんで、分かるの
ー？」

「そうだぜ、探偵気取りでもしてんのか？」

「ってか、犯人ってなんだ？」

「未羽ちゃんには内緒にしてもらいましたが、実は……斉藤 京
平さんは何者かによって殺害されました」
「！？」

巽くんの言葉にみんながそれぞれの反応を示した。
驚いていることには変わりなかった。

「だれ、なの？　犯人は……」

「まずは、密室の謎を解こうと思います」

二階の空き部屋に行き、江戸川くん以外が中に入った。

「まず、未羽が中に入ることを確認した犯人は、扉に耳を付けて音
に集中させた。そして、タイミングを合わせて、この小さな扉の隙
間から催眠ガスを流し込んだ」

音もなく私は眠気が襲った。

立っていることもできず、しゃがみこんでいた。

「そして、物音がしなくなった犯人は扉を開け未羽が眠ってることを確認した」

扉が開いたことなんて気付かず、私は夢の中に入っていた。

「別のところで殺害し、未羽の部屋に運んだ」

「でも、催眠ガスが蔓延してんだろ？」

「……ものの数分って訳じゃないし、扉を叩きつけるように開いたり閉じたりしたら空気は外に流れると思うけど……」

「まあ、この家には防音と温かい空気が逃げないようにスポンジが詰め込まれてるしな。閉める音は響かないだろうし」

さすがは東くん。このロッジの持ち主だけあるから分かってる。

「車とか、空気を入れ替えるのに、扉を勢い良く閉めると良いって、何かの雑学で見たよ！」

しかも、それは元の世界でのことだけど、そのテレビ、いつだったかヤラセや誤報だったかで人気を博したまま終了したとか……。それが事実かどうかはさておき、時間があれば多少の空気は入れ替えてきたと思う。

「さっき、密室とかって……それは？」

「今から見せる。コナン、良いぞ」

「はい！ 巽お兄ちゃん」

「未羽、ここに横になってろ」

「え、うん」

私が寝ていた場所に横になる。

すると、江戸川くんがやって来てワイヤーみたいな糸をズボンのベルトを通す穴に通すと廊下に出て扉を閉めた。

ガチャと鍵が閉まり、扉の隙間からワイヤーが見えた。

ワイヤーって言うより、釣糸かピアノ線みたいだ。

しばらくすると、糸を通してカギがロープウェイみたいにやってきて、私のベルトを通す穴のところでカギが引っかかった。

プチンと糸を切ると、糸は扉の方に消えていった。

「……そっか、密室できた」

「でも、糸は滑るし引っ掛からないじゃないか？　だって、ほら……なんて言えば……」

「滑り止めに、玉止めすれば？　ほら裁縫とかで止める。切れば玉止めの逆の方を切ればスムーズにいくし」

「あ、そっか……」

裁縫が得意で良かったー！！

でも、玉止めて言葉で合ってるかどうかは分からないけど……。

「じゃあ、指を怪我してる……飛鳥くんが……？」

「いや？　それは違う」

巽くんが否定した。

工藤くんとどっちが頭が良いのかな？

やっぱり工藤くんだよな？　巽くん、あんまそういうの好きじゃないっぽいし……。

「未羽の部屋で、ベッドの木材のトゲに血が付いてたんだ。比較的、真新しいもののな」

「……」

「……それは、坂下ミクリ。おまえの血じゃないのか？」

「え？」

「な、何を証拠に言ってるの！！」

「足、見せてくれるか？」

「ミクリちゃん、ごめんね！！」

ズボンの裾を上げると、絆創膏が貼っていた。

新しめの絆創膏が……。

「……ちよつと、怪我をただけよ」

「……ミクリちゃん。警察が来ればすぐに分かるよ？ ミクリちゃん、私が来た後に、このロッジに来た。私の部屋に入る暇は無かったよね？」

「……」

「ちなみに、きみの部屋で糸を見つけた。証拠を隠すなら徹底的にな？ それでも見付けるけどな」

「……っ」

「ミクリちゃん、どうして？ ねえ……」

私が見上げると、ミクリちゃんは悲しそうに笑ってソファアに座った。

「未羽ちゃんー、ちよつと廊下に出ててくれないかな？」

「やだよ」

「……お願い」

「私は、王様なんだよ？ 国民を知るのが王様なのに、何も知らないなんて、やだよ……」

「……………ほんとに、腹が立ったの」
「え？」

私が外に出ないことにため息を溢し力を抜いたミクリちゃん。

「あいつ、ゲームでセクハラしてくるし……それに、ウチの妹がやってたハンネJのことを追い込んだ」

ギュッとズボンを握りしめる。

Jはミクリちゃんがゲームに参加する前のメンバーの一人で、仲良くなれたと思ったら、突然来なくなつた。

「あいつ、何も知らないくせに、雑魚の平民はさっさとくたばれて……いつも、盾にさせられてた」

「……………ミクリちゃん。Jは…………？ どうなつたの？」

「……………自殺、したよ」

「……………」

Jはなんで私に相談してくれなかつたんだろう？

「なんで？ どうして、ミクリちゃんもJも私に話してくれなかつたの？ 力になれたかもしれないのに……」

「あと、気に食わないのは……………王様が」

「私が？ 私が悪いの？」

「違うよ。ムーガを王様が最悪してたからだよ。ウチだって王様の一番になりたかつた。Jも……………王様の側にいたかつた!!」

「……………最悪だなんて。私は……………そんなこと」「分かってる！ 王

様にその気は無かったこと……。でも、ウチが一番でいたかった！
ムーガじゃなく！　ウチを一番にしてほしかった！　確かにレベルは低かったけど……」

「ふざけないで！！」

「……王様」

私は珍しく怒っていた。

苦しみは分かってやれなかった。

ゲーム内では感情が分からないから勘違いも起きやすかった。

「人をその手で殺しておいて、一番が良かった？　あなたは神様になったつもりでいるの？　ムーガさんは……一番じゃない。ムーガさんはいつもサポートに回ってた。それが私を持ち上げるためだとしても、悪く言わないでほしい……。ミクリちゃん、一番に相談してほしかったよ……。同性だからこそ、乗れる相談だってあった。私は……ミクリちゃんも飛鳥くんも東くんも……もちろん、京平さんも……Jも……私にとって大事なんだよ。家族みたいなもので失いたくなかった」

「……………」

全て私のせいなのかな？

私のせいで、みんなが狂ってしまったのかな？

私………王様、失格だ。

「……ウチの想像では、王様は誰をも優しく包める聖母マリアのような女性だと思ってた。だからこそ、ウチと妹は惹かれていた」

「……ごめんね。子供で」

「ううん。ちょっとホツとした。未羽ちゃんが……想像をぶっ壊してくれたから……。未羽ちゃん、ごめんね？　国を壊しちゃって」

「……………東くん、飛鳥くん。ゲーム、もうお仕舞いだね」

「……ああ」

「そうだな」

「二人も……ごめんね……。未羽ちゃん、辛いものを見せて……ごめんね……」

ボロボロとミクリちゃんは涙を流していた。

私に何が言えるんだろう？

私何が出来るんだろう？

「ミクリちゃん。王様の最後の命令、良いかな？」

「………はい。王様」

「………ちゃんと、罪を償ってください。ちゃんと、Jのお墓参り行きますから」

「………ありがとう。妹も喜ぶよ」

闇は破れ、光が射し込んできた。

太陽が顔を出してきた。

みんなで港に向かうと、船がやって来た。

「………」

「ミクリちゃん」

「………」

「ありがとう」

「!!」

お礼の意味は自分でも分からない。

だけど、なんだか言わなきゃいけない気がした。

孤島を脱け出し、ミクリちゃんは警察に連れていかれた。

「……巽くん」

「んー？」

「……ありがとう、来てくれて……」

心配して来た蘭と毛利さんに怒られてる江戸川くんを見ながら、私は呟いた。

「約束しただろ？ 絶対に行くってな」

「……………ねえ、覚えてる？ 小学生の頃に私が迷子になってたのを巽くんは必死に名前を叫びながら捜してたの」

「ああ、覚えてる。この世界に来ての事件だったからな」

「事件ってほどの大それたことじゃないけど……………巽くんが私の名前を呼んでくれるたびに…………」

魔法を使うように未央に戻っていた。

巽くんは声色が変わった私に驚いて、私を見ていた。

「安心してた。巽くんなら……………絶対に私を見付けてくれるって…………、捜し出してくれるって…………」

巽くんが私を心配してくれるだけで、私は場違いにドキドキとしてみよう。

「私は、巽くんだから安心できるんだよ」

「……………そうか」

「これから仕事でしょ？ 無理しないで？」

「ああ、気を付けて帰れよ？」

「……うん」

巽くんは帰ろうとしていた。

途中で江戸川くんは巽くんに話をしていた。
巽くんが私の方を見て何かを言ってた。

「その秘密は、きみが解いてみな。絶対に分からない謎だから」
「……どういう意味だよ？」

「分かんねえよ、おまえじゃ……。俺らも分からねえから」

巽くんが分からないことって言えば、この世界に来たこと……。か？
それしかないよーな……。
な、なんか江戸川くんもこっちを見ているし……。

「……？」

巽くんが口を動かした。口パク？
何だろう……。何を伝えたいんだろ。

「……おまえの、からだの……。ひみつ……。？」

って、バラしたの！？
私が未央だって言ったの？
いや、別にバラしても問題無いんだけど……。

「おまえ、未央なのか？」

「……そうだよ」

「なんで……おまえ」

「それは秘密だよ？　その謎を解明するのが探偵の仕事さ」

人差し指を口元に持って行く。まるで、誰かの真似のように……。一生解くことが出来ない謎だとしても、きみはずっと考えるんだろうね。

それは…

「え……え？ な、なに……。なんでキッドの姿？ 巽くん」

「なんかさー、今度のドラマでキッド役になったんだよ。ほら、俺、新一に顔似てんじゃない？」

必然的にキッドにも似てるって訳だけど……。
誰が脚本したんだろ？

「巽くんって、マジック出来たっけ？」

「黒羽に教わった。ってかさー、おまえ、黒羽とどう出会ったんだ？ 学校違うだろ」

「……………う、ん」

正直、自分も印象は薄いんだけど……。

「黒羽くんとはね、えーっと中学の時に、ほら、学校同士の体育祭があるでしょ？ 大会」

「あー、そういやあったな。そんなの……。学校同士の運動会みたいなのかな」

「それで、んーっと……私、応援団の数合わせで連れていかれたの。教師に」

夏の暑い時期だってことは覚えてる。

確か、蘭も空手部として出ていたような……。

「そこで、まずは青子に会ったの」

思い出すように目を閉じた。

猛暑続きで日焼け止めの効果が薄れてきた時、隣にいる担任を目で殺そうかと思ったりと危険なことを思っていた。

「担任ー！ 喉渴いたからジュース買ってくる」

「おう！ 早く帰ってこい」

嫌だね。

心の中で呟いてから体育会館の中を歩いていた。

「あーもう！ やだー！！」

「？」

特別、あれと言う訳じゃ無いみたいだけど困ってるようだから近付いてみると、女の子が自動販売機を叩いていた。

「おーい、器物損害罪で訴えられるぞー！ 3年以下の懲役、30万円以下の罰金だぞー」

「……あ、ち、違うのー！！ まさか故障してとは思わなくて」

「お金入れちゃったの？」

「うん……」

「ちょっと待ってね」

お釣りを出すレバーを何度か揺らすと、チャリンと音がした。

「あ、出た！ ありがとうー！！」

「いやいや、構わないよ」

「あ、あのさ、この辺に自動販売機無いかな？」
「あっちに――」

指を差してると私の声を遮るように男の子の声がした。

「なにやってんだ？」

「あ、快斗」

「……………」

この聞き覚えのある声は……、そして、その名前は……。振り向けばやっぱり、この時はまだ分かっていない二代目キッドがそこにいた。

「誰だ、おめえ」

「快斗！ この子は青子を助けてくれたの！ その言い方は無いよ！」

「あんだー、アホ子がドジを踏んだんだろ、どうせ」

「……………むっ」

「はいはい。夫婦喧嘩は犬も食わないから」

「だっ、誰が！」

「夫婦じゃないわよ！！」

何だか、メインとは原作無関係で会ったんだ……。そういう運命なのかもしれない。

「私は、未央。きみたちは？」

「俺は、黒羽快斗ってんだ。よろしくな！」

ポンッと赤いバラを出してきた。

この時はもう、普通にマジックを使ってたんだな。

「私は中森青子！ よろしくね、未央ちゃん」

「呼び捨てで良いよ、中森さん」

「じゃあ、青子もそう呼んでよ」

自分が言ったからには拒否権は無いのだろう。

「えっと、黒羽も青子も、どこ中？」

「おい、なんで俺だけ——」

「江古田中学校だよ」

「ああ——」

「私は帝丹中学校」

「へえー、じゃあ近いね！ って、未央ってお金持ちなの？」

首を傾げると、青子は説明してくれた。

帝丹って、そういうえばエスカレーター式で金持ちが通うって聞いたことがあったな……。

こう考えれば、鈴木財閥のご令嬢、推理小説家と元女優の息子、元刑事と弁護士の子。

私だけなんだよな……普通なの。

異くんだって、父親はどっかの社長だし、母親はアナウンサーだとか……。

「私は……中流だよ」

「そうなんだ」

「おい！ なんで俺だけ名字なんだよ！！」

「……ごめん。比較的、男子は名字呼びなんだ」

「……快斗って呼べよ」

「……………快斗」

どうせ当分会うことも無いだろうし、名前を呼んでも問題無いだろうな。

「よし」

「……………よしって」

何が良いんだが分からないけど、何だか知り合いつて感じになりそうにない。

「……………じゃあ、私戻らないと」

「もう行くの？」

「うん、だってそろそろ応援も終わるだろうしね」

「あ、未央って携帯電話持ってる？」

「うん」

「メアド交換しよ！」

青子が携帯電話を取り出した。

私が中学校の頃なんて携帯電話を持たせてはくれなかったのに……。

今の時代は優しすぎるな……。

「未央？」

「何でもないよ、青子。じゃあ、交換しよっか」

「俺も良いか？」

「え」

「……………なんで嫌がるんだよ」

「…………分かったよ」

黒羽くん、と心の中で呼ぶと黒羽くんも携帯電話を取り出した。
ってか、今はキッドじゃないけど情報を垂れ流しにして良いのかな？

「よし、じゃあ後でメールするな」

「…………う、うん」

やっぱり、時代が狂ってるような気がする。
だって、名探偵コナンの初期は携帯電話を持ってなくて、凄く小さいキーホルダー型携帯電話だったような気がする。

「そういうことが原因で出会ったの」

「なるほどな……。でも、それからメル友ってわけか」
「うん」

巽くんとベンチに座りながら話す。

キッドの姿を真似してるかのため、その容姿はキッドにしか見えない。
ない。

だけど、キザなところはない。

まあ、巽くん自身がキザなことは無いからだろうけど……。
たまにキザだけど……。

「とにかく、パンドラを見付けるにしても……中々、うまくいかないからな」

ポンスと何もない所からバラを取り出した。

「キッド……よりも、初代キッドに似てるよね」

「？ どう違う？」

「なんだろう、原作だと三枚目じゃない彼……。だから、かもしれない」

「……ふーん」

横顔が昔と違い大人びていた。

彼らと同じように、また青春が来るなんて思わなかった。

でも、こういう青春も初々しく思えてきて良いかなって……。なんてね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1452o/>

恋を傍観する少女

2010年10月12日11時41分発行